

幕末明治の写真師列伝 第九十六回 宮下欽 その十八

8月26日、津川に到着した松代藩八番狙撃隊と三番小隊の部隊は、翌29日朝、津川を出発して、八十里越えの中の鳥井峠を越えて、さらに岩代国耶麻郡に入り、さらに車峠、野尻を越えて、31日夕刻に野沢に到着し、直ちにこの付近を守衛についた。またそれを追いかけるようにして、松代藩七番狙撃隊と六番小隊の2隊は長州藩兵と共に、30日に野尻付近の守衛についた。

9月1日、松代藩七番狙撃隊と六番小隊は小島村、加賀田村付近を偵察の上、敵がいけないことを確認して、長州藩兵と共に、小島村、加賀田村に分れて宿営する。

9月2日、阿賀野川対岸の敵掃討のため、松代藩七番狙撃隊と六番小隊の2隊と、松代藩八番狙撃隊と三番小隊の2隊、長州藩兵4隊、御親兵一番中隊、岩国隊は芝崎口に集結する。阿賀野川対岸の平明、小綱木の敵攻撃を開始。松代藩六番狙撃隊と五番小隊の2隊も銚子口付近より長州藩兵と共に阿賀野川を渡り道目村に入る。阿賀野川右岸の新発田藩、安芸藩兵の部隊に松代藩、長州藩、御親兵の各部隊が応援して、この大部隊で柴崎より滑津、樟山、石坂と敵を追って前進する。このため陣ヶ峯、平明にいた会津軍もこの攻撃に抗しきれずに館の原方面に向かって敗走してゆく。この結果、芝崎口から平明、真ヶ沢、小綱木方面から敗走した会津軍は、伝習隊200名と共に、阿賀野川北岸の木曾に集結して、征討軍の迎撃体制を図ることとなった。

これに対して征討軍側は、①大谷東側高地より館の原の攻撃を、御親兵中隊、長州藩振武隊、新発田藩小隊が、②小土山を攻撃し小土山より長窪南側高地（鳥屋峠山南の、長窪の南側高地）の攻撃を、松代藩六番小隊、七番狙撃隊、八番狙撃隊、長州藩奇兵隊、御親兵中隊が、③陣ヶ峯より長窪北側高地の攻撃を、松代藩三番小隊、五番小隊、長州藩干城隊、芸州藩小隊が、④陣ヶ峯よりそのまま前進して攻撃を、松代藩六番狙撃隊、長州藩干城隊、岩国藩小隊がと、この4方向から受け持つことになった。

9月4日、攻撃開始。各方面の会津藩兵は大軍の攻撃により守勢となり、さらに館の原には川向うの越前藩大砲隊により焼き弾が打ち込まれて、会津藩が集めた兵糧、小荷駄に着火して燃え上がり、これを知った他の地区の会津藩兵も動揺して、退却を開始した。小土山集落は、現在の福島県喜多方市高郷町の北東に位置し、標高300メートル、今の福島県喜多方市高郷総合支所から約9キロの場所にある。山間部に位置しているため、小土山集落の人々は農業のほか製炭、廻米の運送や峠道の中追馬による駄賃稼などに従事していた。小土山攻撃の命令を受けていた松代藩部隊は、攻撃開始の砲声と共に塩坪付近より阿賀野川を渡って、長州藩奇兵隊、御親兵中隊と共に上郷部落に上陸し小土山へ向かった。（小土山集落は上郷より1キロほどの地点にあり、陣ヶ峯の東方、国道338号線沿いの立岩、新田、早坂の三ヶ所からなる）小土山上には敵の大砲隊が砲壘を築いて、そこから砲撃を仕掛けてきたため、征討軍側は苦戦する。

そこで松代藩部隊は牧野功一郎軍監を先頭に人跡無き一面の笹の草原を、しかも笹も背丈以上に伸びて歩行困難の中を黙々と密かに登って、ようやく小土山山頂に出て、ここより前面の左右の山上にある敵砲壘を偵察した。すると左右の二ヶ所で激戦中の兵士たちを発見したが、どちらが敵味方かよく判らないため、松代藩の軍旗（六文銭の旗）を振ってみると、山中に布陣していた敵が一斉に銃火を浴びせかけてきた。敵兵の数は多く、前面三方から攻撃してきたが、松代藩部隊がいる地形はそれより高い地点であったため、そ

のままここへ布陣して応戦する。この戦いは10時間にも及んだが、激戦の途中で松代藩三番小隊と五番小隊が応援に来てくれたため士気も上がった。その間に御親兵中隊が、率先して小土山の後方へ迂回して敵に攻撃を加え、松代藩部隊もこれと同時に敵に攻撃したところ、両面から攻撃された敵は耐え切れずに陣地を放棄して、小布施原の東方面へ退却していった。

付近の征討軍部隊も敗走の敵を攻撃し、館の原より木曾から小布施原近くまで追撃していった。この時、敵は館の原、木曾村に放火して小布施原（和尚山東部）、小田村（今の喜多方市）方面へ後退していった。松代藩部隊（六番狙撃隊、三番小隊、五番小隊、大砲隊）は館の原村に宿営して、三津合村（今の山都町三津合）の高台に三ヶ所の砲壘を築造して、その守衛の任についた。小土山の戦いに奮戦した七番狙撃隊、六番小隊も9月4日夜これに合流している。館の原村は阿賀川の支流との地点にあり、ここより南は坂下へ、北は小布施原へ通じる道路もある交通上の要地であった。小土山より館の原村に進んだ征討軍の各部隊は8日まで前面の敵に対して砲壘を築いて守衛していたが、各藩の代表者と協議の上、翌9日よりさらに進軍することになった。

その第一隊は、木曾口より薩摩藩（2小隊）、長州藩（2小隊）、越前藩（大砲2門）とその応援部隊に長州藩（1小隊）が、第二隊は、寺内村より総社松峯へ、松代藩（七番狙撃隊、六番小隊）、長府藩（1小隊）とその応援部隊に長州藩（1小隊）、御親兵（2小隊）が、第三隊は、本木口より、松代藩（六番狙撃隊、五番小隊）、越前藩（1小隊）とその応援部隊に松代藩（七番狙撃隊、三番小隊）、芸州藩（1小隊）、岩国藩（1小隊）が進撃することに決まった。これらの進撃部隊は9日夜より翌朝暁までに3隊共に出発することとなり、このうち最も遠い場所に居た第二隊が先頭になって出発した。その他の残余の部隊は残留部隊として、この付近の警備と守衛の任についた。

9月10日午前2時に出発した第三隊は、本木口進撃の途中、藤沢村において第二隊と合流し、その後、寺内村に到着した。そこでこの付近の偵察を試みたところ、敵が全くいない、陣を捨てて敗走した後であることが判った。

この頃、木曾口攻撃部隊の第一隊は慶徳村（喜多方市東南部の慶徳町）において、会津藩と遭遇して、激戦となった。これを知った第三隊の松代藩部隊（七番狙撃隊、六番小隊）は、慶徳村の西側の高地、総社の峯に駆け上がり、敵の背後より攻撃を開始して、その付近にいた他藩の兵と共に、敵の集団へ突撃した。これにより会津藩兵は敗走する。この敗走した兵を追って、松代藩七番狙撃隊が追撃に移り、二本木村に入った。松代藩六番小隊も一方に敗走した敵を追って、三頃村まで進む。三頃村で斥候を出して付近の敵情を探ると、各所に敗走した敵は小荒井駅（喜多方市南方、塩川町）付近に集結していることが判った。

松代藩七番狙撃隊と六番小隊は、会議所より引き上げの命令があり、二本木村まで引き上げ、他の第三隊の兵もここに到着したことから諸藩と協議の上、第二隊は新町村まで進撃することとなった。第一隊はそのまま慶徳村に残留して、警備、守衛の任につく。第三隊がさらに小荒井村まで進撃すると、敵は後退して、塩川（耶麻郡塩川町）と熊倉村に分れ、それぞれそこに布陣して、砲壘も築造し、征討軍を挟撃する体制を整えていることが判った。

（森重和雄）